

2 小中一貫教育に対する本校の基本的な考え方

施設一体型の学校として小中一貫教育を進めていく。

- ・職員室、校務分掌を統合する。
- ・施設設備を有効に共同利用する。
- ・小中学校相互の教師による弾力的で自由度の高い指導体制を作る。
- ・小学校から中学校への引き継ぎが不要となるような児童生徒への関わりを進める。
- ・学習指導要領の範囲内で小中一貫教育を進めていく。
- ・指導内容や方法に一貫性を持たせた教育課程を作る。(小中一貫カリキュラム)
- ・カリキュラムの中に補充的な学習内容と発展的な学習の内容を加え、児童生徒の学力の定着と個性や可能性をのばしていく。

小学校中学校の全教職員で小学校中学校のすべての子どもを指導する。

- ・一人の子どもを中学教師という位置から見たり、小学教師の位置から見ることで子どもを多角的にとらえ、個性や可能性を見つけていく。
- ・それぞれの教師が1人の子どものいろいろな側面に着目して見ていくことで、子どもを多面的にとらえ、個性や可能性を見つけていく。

発達や学習到達度の個人差に配慮した指導システムを構築する。

- ・子どもの発達や身に付けた力の連続性を重視した教育課程を弾力的に取り扱う。
- ・各学年の児童生徒数が少ないため、各年度ごとに子どもにあった年間カリキュラムを作成する。
- ・義務教育段階の大きな節目である小中の連結点を小学校側から、中学校側からといった一面的な見方ではなく、9年間の流れの中で広く両面から見つめていくことで、小学校生活から中学校生活への環境の変化を子どもの発達に合った適切なものにしていく方法を探る。
- ・子どもの発達や小学生・中学生といった社会的な位置づけとその節目を大切にしたい教育体制づくりを行う。
- ・通過儀礼としての儀式を重視し、中学生の制服等の社会的・心理的意義を検討し、それぞれの学年段階での自覚と誇りを持たせる指導を進める。
- ・異年齢集団の適切な組織化（面倒見たり見られたり）によって、希望や見通し、あこがれを持ちやすくしたり（低年齢児童）、大人に向かっている自分を自覚し、誇りを持つ（高年齢児童生徒）機会を作る。
- ・小1から中3までをフレキシブルに組み合わせた学習システムをつくる。いわゆる4・3・2制や4・5制といった固定した運用面での区切りは行わない。

9年間の義務教育を通して子どもにしっかりした力をつけていく。

- ・豊富な体験に基づいた学力形成を進め、他人も自分も大切にできる力を育てる。
- ・年齢差の大きい集団の中で、思いやりのある豊かな心を育てる。
- ・自分の可能性や力を自覚し、確かな自己肯定感をもった人格形成をめざす。